

ディスコース・マーカー「なんか」の発達

— 意味の漂白化 —

林 千 賀

The Japanese word *nanka* can be a pronoun, adverb, particle and a discourse marker. This paper hypothesizes that *nanka* as a discourse marker can be observed in its syntactic position which is far from the predicate as in *nanka ... muzukashii* 'Umm ... (it's) difficult'. That is, more there are linguistic elements between *nanka* and the predicate, more likely the *nanka* can function as a discourse marker. This paper also examines that *nanka* as a discourse marker is resulted as a 'bleaching' phenomenon in its gramaticalization.

Key words : lexical meaning, discourse marker, grammaticalization, bleaching

はじめに

会話において頻々と使用される「なんか」がディスコース・マーカー（談話標識）の1つであることは、いくつかの先行研究によって明らかにされてきた（Philips(1998)、Yamamoto(1998)、鈴木(2000)、Watanabe(2001)、内田(2001)、れいのるず(2001)、福原(2005)）。しかし、「ええと」や「あのう」などのディスコース・マーカーと異なり「なんか」は多義的多機能的である。例えば「なんか」それ自体の辞書的意味は、(1)の「不定の物」をあらわす代名詞、(2)の「など」と同義の副助詞、(3)の「どことなく」という意の副詞などの意味があり多義的である(この3つはイメージ・スキーマを想定することによって基本的に同じ意味と言えない事もないがここでは多義的とする)。また、(4)のようなディスコース・マーカーは、メインポイントの前置き表現であり、他にも話者が適当な表現を探している間のつなぎや、話者交替の前置き表現、トピックシフトの前置き表現などの機能を持つディスコース・マーカーがあるので多機能語である。

- (1) なんか食べるものある？
- (2) 本なんかいいんじゃない。
- (3) なんか寂しい。
- (4) Y : ほとんどそうだとおもいます。こつこつこつこつ無理しないで自分のペースでまあ／後は大学生活は4年間なんで (はい) ととても短いんで。
K : 短いですかやっぱり。
Y : あっという間 (はい) 私も **なんか** (ポーズ) 前期、もう3ヶ月、気付いたら過ぎてて
K : 過ぎてて

しかし、我々はなぜ、わざわざ「なんか」というディスコース・マーカーを使うの难道

うか。内田(2001)は、代名詞や副助詞の「なんか」とは違った機能を持つ言葉(つまり、ディスコース・マーカ)へ文法化されたのではないかと考え、「なんか」がディスコース・マーカであることを実証した。文法化には、本来の意味を弱化あるいは消失する漂白化の概念がある。Traugott(1988)によると談話標識の文法化の段階では語用論的強化、漂白化、そして主観化が関与していると秋元(2003)は説明している。ただ、内田(2001)では、副詞から文法化されたことと意味の漂白化については言及されていなかった。そこで、本研究では、ディスコース・マーカの「なんか」が(3)のような副詞的用法の「なんか」から文法化したと考え、その過程の1つである意味の漂白化をデータから示し、考察することとする。

それでは、まず、先行研究でディスコース・マーカの「なんか」が不定詞や副助詞の「なんか」から文法化したという内田(2001)を概観し、次に「なんか」の語彙的意味とディスコース・マーカの機能を概観した上で、本研究の分析目的である文法化の過程の1つである「漂白化」について概観する。次に漂白化がどのようにおこるのか仮説をたて、大学生の会話データと筆者の作例を用い、意味の漂白化を考察しながら、仮説を実証することとする。また、本稿では今後ディスコース・マーカをDMと表記することとする。

1. 先行研究

1.1. 不定詞や副助詞の「なんか」から文法化したという内田(2001)の研究

内田(2001)の研究は、2つの点で本研究の基軸となった。まず、1つは、DMは、代名詞や副助詞の「なんか」から文法化したということ、次に会話表現の「なんか」はDMであると検証したことの2点である。文法化については、DMの「なんか」は、代名詞や副助詞の影響を受けた事により、ディスコースでも直後の発話全体を「不明確」な意味として際立たせたり、不明確な部分に対する自らの態度や判断などを含んだ表現に文法化していったことを明らかにした。しかし、辞書的意味の副詞の機能、及びそれからの文法化と意味の漂白化については言及しておらず、これを本稿の分析目的とする。それから、内田(2001)は、DMについて、(会話でひと息に言い切れる発話を一つの単位とした)“intonation unit”によって対象物・出来事・特性などの“concept”が伝えられると指摘したChafe(1987, 1994)の概念を利用し、「なんか」を「現代日本語の会話に見られる、代名詞や副助詞と異なった「なんか」は聞き手にとって新しい事柄を伴う前置きのディスコース・マーカである」(2001:3)という仮説を立て分析した。

次に本研究の対象となる副詞的用法の「なんか」には、どのような意味機能があるのか、又、DMの「なんか」には、どのような機能があるのか、先行研究によって概観する。

1.2. 「なんか」の語彙的意味とDMとしての機能

松村(1971,1993,1995)、森田(1984)、山口(1990)、飛田(1994)、新村(1998)、梅棹(1998)を大きくまとめると、「なんか」には次のような3つの意味がある(例はそれぞれ飛田1994:389から抜粋する)。

- ① 連語の代名詞的用法で不定の物・事あるいは、未知の物事を表す(「名詞か+なにか/名詞や+なにか」なども含める)。(5)のような例がみられる。

(5) 機械がなんかの加減で突然動かなくなっちゃったんだろう。

② 副助詞的用法で「など」と同義（対象を否定的にみたり、取るに足りないものとして取り上げるのに用いる用法も含める）。(6)や(7)のような例があげられる。

(6) 老後の趣味に油絵なんかどうですか。

(7) ママなんか大嫌いだ。

③ 連語の副詞的用法で形容詞／形容動詞また、動詞に修飾する「どことなく」の意をあらわす。(8)の例で示す。

(8) 誰もいない初秋の海はなにか寂しい

①の代名詞的用法や②の副助詞的用法の「なんか」については、内田(2001)や鈴木(2000)で詳しくまとめられているので項を譲ることにし(内田(2001)、鈴木(2000)参照のこと)、本研究では、上の③(8)のような副詞的用法の「なんか」について概観する。また、DMの機能については、本研究の分析対象である Philips(1998)を概観することとする。

1.2.1. 副詞的用法の「なんか」

この類は、③で示したように形容詞や形容動詞に修飾する「どことなく／なぜか」の意の副詞的用法であり(森田(1984)、松村(1993,1995)、飛田(1994)、新村(1998)、梅棹(1998))、例を(9)と(10)で示すこととする。森田(1984)は、「そのような状態になる原因が不明であることを表す。どうしてか、なぜかわからない、つまり、どことなくである。精神・感情・感覚など主観的な状態に用いる」と述べている(事例(9)、(10))。梅棹(1998)では、「どことなく、なにやかや、なんとなく」とし、英語の“somehow”と同義としている。また、森田(1984)は、「「なんか」は精神状態を間接に表す言い方として、動詞が接続することもある」とも述べている(事例(9)、(10))。以上、このような事例(9)、(10)が副詞的用法の「なんか」である。

(9) なんかおかしい(松村1995)。

(10) なんかじんと胸にくる(森田1984)。

次に「なんか」のDMにはどのような機能があるのか概観することとする。

1.2.2. DMの「なんか」の機能

Schiffrin(1998)は、DMは、与えられた文脈において発話と発話の関係、話し手と発話の関係、話し手と聞き手の関係を明らかにするものであると述べている。Philips(1998)は、Schiffrin(1987)のいうDMをさらに「接続詞」、「フィラー」、「終助詞」に分類し、「なんか」を「フィラー」として分類し、日本語母語話者と日本語学習者の用いる談話標識について研究を行った。その結果、全体のフィラーの内、「なんか」(18.4%)は「あのう」(20.7%)の次に多いことがわかった。また、インフォーマルなスピーチ、若年層、女性、会話に「なんか」の使用の頻度が多いことが統計的データによって明らかになった。「また、この「なんか」は、つなぎの機能、hesitation(躊躇)、uncertainty(不確かさ)のマーカーとして、次のような機能があるとまとめた(下記のもの、筆者が要約したものである Philips(1998:141))。本稿では、この Philips(1998)の分類を分析の対象とした。

(1) 「I. Production-related function (つなぎの機能) :

① floor-holder (話者が適当な表現を探している間のつなぎ)

II. Socially motivated function (hesitation マーカーとしての機能) :

- a) 自分の言っている内容がなぜなのか不確か
- b) 話者と聞き手の関係において話し手が相手に同意可能な環境を作る

② turn-initiator (ターン取り)

③ 話のメインポイントの前置き

④ トピックシフトの前置き

III. 不確かさ、曖昧性を表現する機能 :

⑤ 知識、記憶の欠如を示す

⑥ 話者の明言の断定をさけることを示す

①の“floor-holder”のフィラーは、話者が適当な表現を探している間のつなぎとして使用される「なんか」で、本研究では①を「つなぎ」とする。そして、hesitation (躊躇) マーカーとしての機能をもつ②から④をそれぞれ分類すると次のようになる。まず、②の“turn-initiator”のフィラーは、新しい話者がターンを取る時、「なんか」で前置きをしてからターンをとる。本研究では、②を「話者交替の前置き」と呼ぶ。そして、③の話のメインポイントの前置きのフィラーは、話者の発話内容のメインポイントを言う時、「なんか」で始める。本研究では、③を「メインポイントの前置き」と呼ぶ。そして、④のトピックシフトの前置きのフィラーは、新しいトピックに移る時の前置き表現である。本研究では、④を「トピックシフトの前置き」と呼ぶ。そして、不確かさ、曖昧性を表現する機能である「⑤知識、記憶の欠如を示す」フィラーと「⑥話者の明言の断定をさけることを示す」フィラーは本研究の対象からはずすこととする。なぜなら、これらは、「不定の物・事あるいは、未知の物・事」の意をもつ代名詞的用法から文法化したと筆者は考えるからである。従って、本稿では、副詞的用法の「なんか」と①～④の具体的例をデータから概観することとする。

次に本研究の中心となる概念である文法化について述べ、その過程に起こる漂白化とどのような関係があるのか概観する。

1.3. 文法化とは

文法化とは「内容語(語彙的内容をもった要素で、動詞や名詞など)が機能語(語彙的内容が希薄で、助動詞や前置詞・助詞など)に通時的に変化すること」を言う(菅井2003:173)。例えば、完了の一種の“have a letter to write”では“letter”は非指示的で、そのため“have”の所有の意味が弱まり(漂白化)、義務の語用論的推論が強まり、次第にその義務の意味が「意味化」し、その結果、目的語は存在しなくてもよくなっていったと秋元(2003)はまとめている。そして語用論的推論とは、会話の含意が、ある文脈中頻繁に現れることによって、習慣化、あるいは意味化するようになり、その過程で多義が生じ、やがて一方の意味が優勢になることであると秋元(2003)は付け加えている。談話標識の文法化の発達には主観化という概念もあり、それは「指示的、命題的意味からテキスト的、感情表出的、あるいは対人的への意味変化」(秋元2003)である。従って、筆者は、談話標識の文法化の過程には

(i)特定の構文、(ii)漂白化、(iii)語用論的強化、主観化、及び多義の意味などの現象がある
と考える。そこで、本研究の目的である意味の漂白化(Bleaching)について秋元(2003)の
説明を中心に概観する。

1.4. 意味の漂白化(Bleaching)とは

漂白化とは、意味の弱化あるいは消失を言うが、反対に意味の一般化(semantic generalization)、また意味の縮小(semantic reduction)とも言われると秋元(2003)は述べている。また、「しまう」の動詞から「てしまう」の補助動詞となった場合(大堀2004)や、英語の“go”の「行く」の具体的方向を示す動詞から“be going to”の未来を示す時間的方向を表す機能に変化した場合(秋元2003 (Sweetser 1988の例)、意味が消失するのではなく意味が抽象的になると同時に文法機能が新たに獲得されているという点で、スキーマ化とそれにとまなう意味の転化であると Sweetser(1988)が述べた点を大堀(2004)はまとめている。また、秋元(2003)が Bybee et al(1994)が、漂白化を文法化の必須条件とみなしていることも述べている。また、秋元(2003)は、Fischer(1994)が英語の“have to”の助動詞化に関して、haveの所有の意味が漂白化したことより、語順の変化で“have”とto不定詞が隣接するようになり、その結果“have to”の助動詞化が生じたと考えることを指摘しているが、本稿の副詞の「なんか」がDM化した点もこの語順の関係が影響していると思われるが、詳しくは後に述べることとする。

では、副詞的用法の「なんか」の意味が、どのように漂白化され、DMへと文法化していったのだろうか。本研究では、このような漂白化の過程のメカニズムを明らかにするため、仮説をたてデータをもとに分析し、考察することとする。

次に「なんか」の文法化を前提に仮説をたて、それについて述べることとする。

2. 定義と仮説

副詞的用法(1.2.1.)の「なんか」は、「_____こわい感じの人だ」「_____おもしろい」という文のアンダーラインの箇所に「なんか」がくるのであるが、そこに「どことなく、なぜだかわからないが(somehow)」という言葉で代替してみると、同じような意味になる。それに対して「これ_____君によく似合うんじゃない」のような副助詞の用法(1.2.)や「風呂敷か_____あったら貸して下さい」のような連語の代名詞的用法(1.2.)の「なんか」には、当然、代替できない。しかし、「これ(ポーズ)なんか(ポーズ)よく似合うんじゃない」と、間にポーズを置けばDMとしての「なんか」の機能になる。また、上の「どことなく、なぜだかわからないが」の言葉も代替でき、「なんか」自体の意味は、「よく似合うんじゃない」に修飾し、副詞的用法となるのである。つまり、ポーズを置いた場合、その「なんか」は、副助詞的用法の「など」の意味ではなくなるのである。しかし、「風呂敷か_____あったら貸してください」の文においては、いくら「なんか」の前や後にポーズを置いたとしても意味は変わらず「名詞か+なんか」の“or something”という不定詞的用法の意味のままである。このように「なんか」の意味はポーズをおいたりすることによって意味がかわるものとそうでないものがある。本稿では、「_____こわい感じの人だ」のような副詞的用法の「なんか」を分析の対象とする。副詞的用法は、ポーズをおくこと

によって「ディスコース・マーカ―」の機能が加わるようであるが、意味は変わらない。統語上「なんか」と修飾部の位置の距離が関係しているのであれば、次の例はどうであろうか。

- (12) a. でもなんか(p)すごい問題が起った時に(あいづち)先生に相談するのが
むずかしいかなって
b. でもなんかむずかしいかなって

(12) b の「なんか」は、(12) a の DM の「なんか」と「むずかしいかなって」の被修飾部間の距離を縮めた人為的な文であるが、(12) b は DM としての機能はなく、また「どことなく、なぜだかわからない(somehow)」の代替えが可能な副詞的用法となる。つまり、DM の「なんか」は、副詞的用法の「なんか」から文法化し、DM 化したと言えるのではないだろうか。

そこで本研究では、DM の「なんか」は、副詞的用法の「なんか」から文法化し、DM 化したということを前提に意味の漂泊化の観点から以下の仮説をたてる。

- (13) 仮説 : ディスコース・マーカ―の「なんか」は、「なんか」の位置と被修飾部の位置との間の統語上の時間的距離が大きくなればなるほど、副詞的用法の「なんか」の意味が弱まり(漂泊化)、ディスコース・マーカ―としての機能が強まる。

この仮説を実証するために、「なんか」が副詞的用法から文法化した現象を事例と共に示すと同時に仮説を実証することで漂泊化の発生のメカニズムを明らかにしていく。統語上の時間的距離とは、文の中で「なんか」の位置とその被修飾部の位置関係が近いか遠いかの距離であって、それによって副詞的用法の「なんか」の意味が強まったり弱まったりする。また、弱まった場合はディスコース・マーカ―としての機能が強まるのではないかという仮説である。

なお、DM の中で、「どことなく、なぜだかわからないが」のような“somehow”の意味を含める「なんか」を副詞的用法の機能と定義する。また、DM の機能の分類は、1. 2. 2. で示したように Philips(1998)に従う。そして、DM の分類から、「どことなく、なぜだかわからないが」という表現と置き換え可能かというテストにパスしたものを DM の「テキスト的表現(textual)」の「なんか」と判断する。さらに、「どことなく、なぜだかわからないが」と置き換え不可能(つまり意味の消失)、かつ「あのう」/「えっと」という表現と置き換え可能(つまり、DM であること)というテストにパスしたものを「感情表出(expressive/interpersonal)」の「なんか」と判断する(DM の「なんか」は、「あのう」/「えっと」とは同じ機能ではないが、本稿では、それらを判断基準のツールとする)。また、このようなテストを判断テストと呼ぶことにする。次にこのような仮説をどのように実証していくのか、データと分析手順について述べる。

3. データと分析手順

被験者は若い女性(18歳から21歳まで)を選んだ。日本語母語話者の女子大学生を対象

に調査を行った。全員初対面で、7組の会話をビデオテープに収録した。1組7分間ずつ、大学生活について（クラブ活動、授業、住まい、等）自由に話してもらった。合計、約50分の会話は、全て文字化して分析の対象とした。会話データを記述するための記号、略字については、メイナード(1998:88)を参考とした。また、「なんか」の前後に一拍（息継ぎ）以上のポーズが置かれた場合、(p)で示すこととする。分析手順は、次のようである。

- (i) 会話の中から「なんか」を取りだし、語彙的意味で使われている「なんか」とDMの「なんか」に分類する。
- (ii) DMの「なんか」を4つ（つなぎ、話者交替の前置き表現、トピックシフトの前置き表現、話のメインポイントの前置き、または、後置き表現）に分類する。
- (iii) 判断テストをおこなう。
- (iv) 「なんか」が副詞的用法から文法化したと思われる事例を示しながら、仮説の具体例を事例から明らかにする。

これらの手順に従って、まず、量的結果を述べた後に仮説の具体例を事例から示すと共に意味の漂白化を示す。そして仮説を検証することとする。

4. 結果と考察

4.1. 量的分析

約50分のデータから78の「なんか」が検出された。その内、DMの「なんか」は59あった。先行研究で示した語彙的意味（不定詞、副助詞、副詞）とDMのそれぞれの機能が、本研究の会話データでどのような頻度で現れているのか、つまり、分析手順(i)と(ii)の結果を表1に示す。

表1 分析手順(i)と(ii)の結果

50分の会話データからの多機能語の「なんか」	頻度
語彙的意味の「なんか」	
不定詞的用法	9
副助詞的用法	2
副詞的用法	8
	小計 19
ディスコース・マーカとしての「なんか」	
つなぎ	18
話者交替の前置き	11
トピックシフトの前置き	11
メインポイントの前置き	19
	小計 59
	合計 78

結果の内、語彙的意味の「なんか」は、19あった。そしてDMは、59あった。では次に、DMの中で「どことなく、なぜだかわからないが」と置き換え可能の判断テストにパスしたものとそうでないものを分類するとどうなるか表2で示した。次の表2は、分析手順(3)の判断テストを行った結果である。

表2 判断テスト結果

	ディスコースの機能と副詞的用法と代替え可能なもの		ディスコースのみの機能 (意味の消失)	
つなぎ	0	×	18	○
トピックシフトの前置き	2	○	9	○
話者交替の前置き	5	○	6	○
メインポイントの前置き	19	○	0	×

表2では、メインポイントの前置き表現は全て「どことなく、なぜだかわからないが」と代替え可能で、「つなぎ」の「なんか」は代替え不可能で「どことなく、なぜだかわからないが」という意味は残っていなかった。つまり、副詞的用法の「なんか」の意味が「消失」されていることになり、意味の漂白化が起こっているのである。また、話者交替の前置きとトピックシフトの前置きには、判断テストにパスしたものとパスしなかったものがあった。それは、「どことなく、なぜだかわからないが」という意味があったものとなかったものがあったということである。換言すると、それらは、意味の消失ではなく「弱化」と言える。しかし、これも意味の漂白化の一部と言えよう。従って、意味の弱化度合いとそれぞれの頻度の相関関係を分析すると以下の図1のような漂白化の文法化過程があることがわかる。

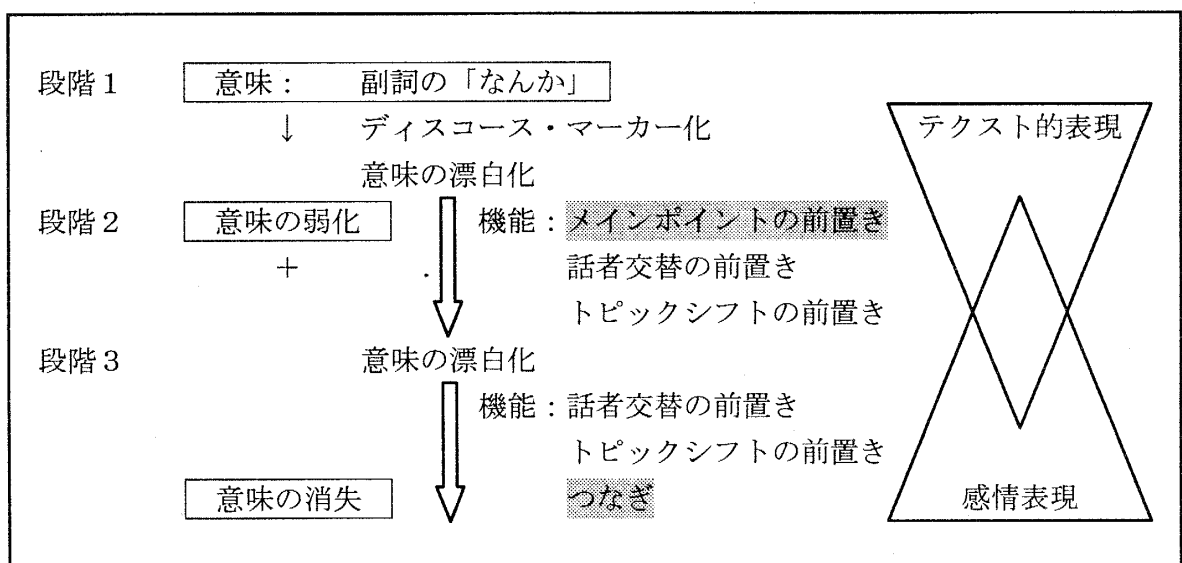


図1 文法化の過程：漂白化

段階1は、副詞的用法の「なんか」のカテゴリーでDMの機能はない。従って「テキスト的表現」と言える。また段階2は、判断テストにパスしたDMの層である。従って、副詞的用法の「なんか」の意味機能とDMの機能が共起している。つまり、2つ以上の機能を同時に担うことができる多機能語である。段階3は、判断テストにパスしなかったDMの機能のみを持つ層で「感情表現」である。

次に上の漂白化の文法化過程をふまえて分析手順の(iv)である「なんか」が副詞的用法から文法化したと思われる事例を示しながら、時間的距離の観点から仮説の具体例を事例から明らかにする。まず、「つなぎ」のDM、そして「トピックシフトの前置き」、「話者交替の前置き」、「メインポイントの前置き」のDMの順に、意味の消失と意味の弱화를データから分析し、考察する。

4.2. 分析と考察

はじめに判断テストで「意味の消失」とされた「つなぎ」のディスコースから分析し、考察する。次に判断テストで「意味の弱化」とされた「トピックシフトの前置き」と「話者交替の前置き」をそれぞれ分析し、考察する。最後に、判断テストに全部パスした「メインポイントの前置き」を分析し、考察することとする。

4.2.1. 意味の消失

4.2.1.1. 意味の消失と「つなぎ」の機能をもつDM

この「つなぎ」の機能を持つDMの「なんか」は、最も典型的な機能であり、発言権を維持するために間をつなぐ標識である。このような「つなぎ」のDMは、全体の59の「なんか」の内から19の「なんか」が検出された。そしてこのDMは、判断テストの結果、意味が消失していて意味の漂白化が起こっていることがわかった。

(14) S: ええ、どんな内容やってるんですか。

K: それは、**なんか**、あのう、ううううええっと (笑い) /

S: 説明するのが難しい? (笑)

(14)のデータでは、DMとしての機能のみの「なんか」である。話者Kは説明することに手間取っており、適当な言葉が見つかるまで「なんか」でフローを持ち続けようとしているが、結局、適当な言葉が見つからず、相手にフローのターン（話者交替）を譲ってしまった。この「なんか」には、副詞的用法の意味機能は見当たらない。

次に判断テストより、パスしたものしなかったもの、つまり、「どことなく、なぜだかわからないが」という副詞的意味機能があるものとなないものがあった「トピックシフトの前置き」表現について考察する。

4.2.1.2. 意味の消失と「トピックシフトの前置き」の機能を持つDM

この「なんか」は、新しいトピックが変わる前に「なんか」が置かれているDMである。このカテゴリーは、11の「なんか」の談話が検出され、その内、判断テストにパスしたもの、つまり副詞的用法があるものが2で、パスしなかったディスコースのみの機能のものが9あった。では、具体的な例をデータから取り出し考察する。ここでは、判断テストに

パスしなかった例を示しながら仮説を検証する。

- (15) a. F: 勉強してますか。勉強してます?
K: 勉強は、テストの前とか/
F: ですよ。
K: なんか(p) 友達がフラメンコやり始めて
F: うん
K: すっごい羨ましいかなって/感じで/

b. なんかすっごい羨ましいかなって/感じで/

(15a) のデータは判断テストにパスしなかった「なんか」である。つまり、副詞的用法の意味機能はこの談話にはない。また DM の機能では、「勉強」のトピックから「フラメンコ」のトピックにシフトされる前に「なんか」が使用されていて、「なんか」の後、ポーズをおいてトピックがシフトされている機能である。しかし、(15b) のようにポーズとあいづちなどを省き、「なんか」と修飾部の位置（「羨ましい」）の距離関係を統語上縮めた筆者の作例に置き換えると副詞的用法の機能があることがわかる。この場合の判断テストでは、「どことなく、なぜだかわからないが(somehow)」に代替可能になり、「副詞的用法」の意味機能がある。しかし、データ(15a)で、判断テストを行うと、「副詞的用法」の意味はなく、「あとう」/「えっと」に代替でき、DM の機能だけとなる。つまり、談話上、意味が消失していても統語上、時間的距離が縮まれば DM の機能が弱まり、副詞的用法の意味機能が強まるのである。従って、この事例は副詞的用法の意味機能が消失し、統語上時間的距離ができたことによって、トピックシフトの DM に文法化した具体例であると考えられる。では、話者交替の前置き表現では、どうであろうか。

4.2.1.3. 意味の消失と「話者交替の前置」の機能を持つ DM

話者がターンを取る（話者交替）時の前置き表現の機能を持つ DM の「なんか」のカテゴリでは、11の「なんか」の談話が検出され、その内判断テストにパスしたもの、つまり副詞的用法があるものが5で、パスしなかったディスコースのみの機能のものが6あった。

- (16) a. Y: 勉強してるうちになんか好きになって
S: でもなんか(p) 語学って私まだ英語しかわからない。
Y: うん
S: 英語もそんなに分からないんですけど、

b. でもなんかわからない

(16a) のデータは、話者 S が「でもなんか」でターンを取っている DM の機能である。しかし、これも判断テストでは、副詞的用法の意味機能がなく、DM の機能があるのみである。「なんか」と「わからない」（アンダーライン部）との間に統語上、時間的距離があることが(16b) と比べてもわかる。つまり、これもトピックシフトの前置きと同様に談話上、副詞的用法の意味が消失していても時間的距離が縮まれば DM 化の機能が弱まり、副詞的用法の意味機能が強まるのである。従って、この事例も副詞的用法の「なんか」の意味機能が消失した DM であっても、統語上、時間的距離が縮まれば、副詞的用法の意味を持つ例で、トピックシフトの DM に文法化した具体例であると考えられる。

しかし、4.2.1. で述べた「つなぎ」に関しては、このようにいくら時間的距離を縮めたとしても「なんか」に副詞的用法の意味はなく、意味の消失がおこっているままである。

4.2.2. 「話のメインポイントの前置き」と意味の弱化

次に話のメインポイントの前置きまたは後置き表現の機能がある DM としての「なんか」はデータの中で一番多く、19検出された。しかし、これらの中には、DM としての機能と副詞的用法としての機能の両方の機能が同時に働いている例があった。では具体例を(17)、(18)で示す。

(17) M : ちゃんと受けてるんですよ。なんか(p)クラスの雰囲気がすごいよくて

S : ああ

M : 人数がたぶん20人もいないんですけど／

(18) K : ええ、英語はどうですか。

R : 英語？なんか聞くのは慣れたかなって感じですね。どうですか？
英語／

K : しゃべる環境は慣れたかなって／いうぐらいかな。

データ(17)、(18)では、メインポイントの前置き表現の機能がある DM として「なんか」が使用されていて、副詞的用法の機能も含まれていることが判断テストからわかった。従って、このカテゴリーは、「なんか」が2つ以上の機能を同時に担うことができる多機能語であり、「なんか」は副詞的用法から文法化した典型的な例と言えよう。そしてこの場合、統語上2つの位置の距離が比較的短いため副詞的用法の意味と機能が強く働いていると考えられる。つまり、データ(17)と(18)のように「なんか」と被修飾部の位置の距離関係が小さい方が、前出の(16)の位置の距離関係が大きいデータより副詞的用法の意味が強いと言える。

以上のようにディスコースレベルから文レベルへという具合に分析することにより、「なんか」の位置と被修飾部の位置の間の時間的距離が大きくなればなるほど、本来の副詞的用法の機能が弱まり（意味の漂白化）、DM としての機能が強まる」という仮説を検証することができた。換言すれば、統語上において時間的距離が小さければ小さい程、副詞的用法の機能が強まり、大きければ大きい程、DM の機能が強まるのである。

4.3. 「時間的距離」の考察

4つの DM をデータから取りだし、仮説を検証したわけであるが、このように「なんか」の位置によって「なんか」の意味や機能が変わるといふ本稿の視点は、葛西(1998)の「法表現の位置と段階性」という研究と共通点がある。葛西(1998)は、「法表現（いわゆる話し手の心的態度の表現）が位置によって、法表現らしさが変わる(p.153)」と述べ、「法副詞」のあらわれる位置関係によって意味や機能が変わることを具体例で示している（詳しくは葛西(1998)を参照）。そして同じ法表現でも、その位置により、意味・機能が決して一様ではなく変化すると指摘している。また、認知言語学の観点から捉えると、これは「記号レベルの遠近関係が概念レベルの遠近関係を反映する」(塩谷 2003)という遠近性の特徴であると言えるのではないだろうか。塩谷(2003)は、遠近性を「記号レベルで近い関係にあるものほど（相対的）に意味的にも近い関係にあり、逆に記号レベルで遠い関係にあるも

のほど、(相対的に) 意味的にも遠い関係にあるものである」と説明しているが、本研究においては明言をさける。従って、「意味の漂白化」と「遠近性」の関係を今後の課題とする。

5. まとめ

本稿では、会話特有の表現「なんか」を語彙的分析とディスコースレベルの分析から捉え、意味の文法化(漂白化)を「時間的距離」という観点から研究を行った。まず「「なんか」の位置と被修飾部の位置との間の時間的距離が大きくなればなるほど、本来の副詞的用法の意味が弱まり、DMとしての機能が強まる」という仮説の具体例を会話データと筆者による作例とを比較しながら示した。そして、ディスコースレベルでは、DM化された現象を具体的事例で明らかにしたことにより、「「なんか」の位置と被修飾部の位置の間の時間的距離が大きくなればなるほど、本来の副詞的用法の機能が弱まり、DMとしての機能が強まる」という仮説の検証をすることができた。しかし、ポーズの長さを「一拍」という主観的な単位で表しただけで科学的に表示できなかったことと、判断テストが主観的判断になってしまったことは本稿の主張を明言できず、反省点を残す。従って、判断テストを客観的なデータとするために何人かのテスターに同じ判断テストを行ってもらい、そのデータをもとに同じ観点から考察したいと考えている。

[引用文献]

- 秋元実治. 2003. 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- Chafe, Wallace. 2000. 「英語の認識モダリティ」『認識のモダリティとその周辺—日本語・英語・中国語の場合』 西川賢哉訳 pp.20-37.
- 福原裕一. 2005. 「ディスコース・マーカ―「なんか」におけるポライトネス機能について—一若者言葉を中心に—」『社会言語科学会第15回大会発表論文集』社会言語科学学会
- 飛田良子・浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 葛西清蔵. 1998. 『心的態度の英語学』リーベル出版.
- 松村明編. 1971. 『日本文法大辞典』明治書院.
1993. 『大辞林』第2版 三省堂.
1995. 『大辞林』第2版 三省堂.
- メイナード・K・泉子. 1998. 『会話分析』くろしお出版.
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語』角川書店.
- 新村出 編 1998. 『広辞苑』岩波出版
- 大堀壽夫. 2004. 『認知言語学』東京大学出版
- Philips, Meiko Kimura. 1998. “*Discourse Markers in Japanese: Connectives, Fillers, and Interactional Particles*” UMI dissertation Services, Abell & Howell Company, Ann Arbor MI.
- れいのるず秋葉かつえ. 2001. 「ポーズ・フィラーから見た女性の話し方の変化と現状」遠藤織枝編『女とことば』明石書店 pp.100-112.
- Schiffrin, D., 1987. *Discourse markers*. Cambridge, University Press.

- 塩谷英一郎. 2003. 「第5章 認知からみた言語の構造と機能」『認知言語学への招待』辻幸夫（編）大修館書店 pp.183-212
- 鈴木佳奈. 2000. 「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』Vol.9: pp. 63-78.
- 菅井三実. 2003. 「第4章 概念形成と比喩的思考」『認知言語学への招待』大修館書店
- 内田らら. 2001. 「会話に見られる「なんか」と文法化：「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか？」『東京工芸大学紀要』 Vol.24 No.2 pp.1-9.
- 梅棹忠夫（他）1998『日本語大辞典』第二版 講談社
- Watanabe, M., 2001. “Fillers as Indicators of Discourse Segment Boundaries in Japanese Monologues” *Journal of Pragmatics* 20: pp. 485-496.
- 山口堯二. 1990. 『学研国語大辞典』学習研究社.
- Yamamoto, Yoshiko. 1998. “*Japanese Fillers and Psychological Distance*” UMI